

佳作

## ぼくのたからもの

愛知県名古屋市中川小学校二年 江藤 愛翔

ぼくが、一ばんうれしかったことは妹が生まれたことです。今までずっと一人っ子だったので兄弟がいるお友だちがうらやましかったです。お母さんに「兄弟ができるよ」と言われた時は、とてもうれしくてびっくりしたのを覚えています。ぼくは、本当は弟がほしかったけれど妹でした。でも、とてもうれしくてまい日お母さんのおなかにいる妹にピアノをひいてあげました。すると、元気にうごいてくれてぼくは、とてもびっくりしました。妹が生まれてはじめて会った時は、とても小さくてびっくりしました。そっとゆびを出すと、小さな手でぼくのゆびをギュッとぎってくれました。少し前までお母さんのおなかの中にいたのにとてもふしぎな気もちになって、はじめてお兄ちゃんになったんだと思いました。

妹は、どんどん大きくなって、一人ですわったりいどうができるようになりました。すぐにころがったりぶつかりそうになるのでとてもヒヤヒヤします。でも、お母さんに、

「あなたもこうやって一つずついろいろなことができるようになったんだよ。」

と言われて、たくさんのができるようになったのは、みんながおうえんしてくれたりしたからだと思います。だからぼくも、妹のできることがふえるようにおうえんしようと思いました。妹がなにかできるよになるとぼくは、自分のことのようにうれしくなります。

たった一人の大きな妹をぼくは、まもってあげたいと思っています。こまっていたりしたら一ばんにたすけてあげたいです。お母さんがよく「兄妹なかよくしてね」と言います。ぼくは、当たり前だと思っています。ずっとなかのいい兄妹でいたいです。妹は、ぼくのたからものです。